

ふさわしい礼拝

ローマ人への手紙 12章 1節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして毎月第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話ししています。今月のテーマは、「礼拝」です。今日は、ローマ人への手紙から、神様が私たちにどのような礼拝を求めておられるのかを学びたいと思います。

1. 神のあわれみによって

1節にはまず、「**ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます**」とあります。ローマ人への手紙は、全部で16章ありますが、1-11章までが「救いの教理」について書かれています。そして12-16章までが「信仰生活の実践」が書かれています。その意味で、今日の聖書箇所12章1節はちょうど、「救いの教理」から「信仰生活の実践」へと話が変わっていく所なのです。

パウロはここで、「救いの教理」によって神様の「あわれみ」を豊かに学んだあなたがたにぜひ「勧めたい」「信仰生活の実践」があると言うのです。私たちは、「救いの教理」を学ぶだけでは駄目なのです。「救いの教理」を学んだら、「信仰生活の実践」へと進まなければならないのです。

「救いの教理」は、神様の恵みが語られます。神様が私たちに、どんなに素晴らしいことをしてくださったかというものです。しかし私たちは、神様が私たちに、どんなに素晴らしいことをしてくださったかということだけでなく、神様が私たちに、どんなことを求めておられるかということも知らなければなりません。

私たちは、この両面を知らなければなりません。神様が私たちに、どんなに素晴らしいことをしてくださったかということだけを聞いて、神様が私たちにどんなことを求めておられるのかに耳を傾けないのは不健全です。そのような人は、「無律法主義」に陥ります。つまり神様に愛され、赦されているのだから、そんなに一生懸命に御言葉に従わなくて良いという考えに陥ります。

逆に、神様が私たちにどんなことを求めておられるのかということだけを聞いて、神様が私たちにどんなに素晴らしいことをしてくださったのかに耳を傾けないのも不健全です。そのような人は、「律法主義」に陥ります。つまり自分の行いによって救われようとして、いつまでも救いの確信を持つことができません。

私たちには、「教理」と「実践」の両面が必要なのです。「恵み」と「行い」の両面が必要

なのです。神様は私たちを愛し、イエス様によって私たちを罪の奴隷から贖い出し、新しいのちを与え、神様の子どもとしてくださいました。私たちは、そのような神様の「あわれみ」を受けたのです。神様は、その神様の「あわれみ」に應えてほしいと願っているのです。神様は、御自身の愛と恵みに対する応答を、私たちに求めておられるのです。

私たちは「教理」から「実践」へという順序も大切にしなければなりません。「恵み」から「行い」へという順序が大切なのです。「行い」によって「恵み」を得るのではなく、「恵み」を得たから、「行い」で応えるのです。クリスチャンの信仰生活の根底にあるのは、神様の恵みに対する感謝の応答なのです。「神様の恵み」に應えて、「良い行い」に励んでいくのです。

2. からだを献げる

では、私たちを愛し、豊かな恵みを与えてくださった神様は、私たちに何を求めておられるのでしょうか。パウロがその「信仰生活の実践」でまず第一に語っていることは、「礼拝」です。「**あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です**」。

神様が私たちに求めておられる「礼拝」は、私たちの「からだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げる」ことです。これは「献身」ということです。

神様が私たちに求めてられる「礼拝」は、主の日に集まって、賛美と祈りと、聖書朗読と説教と聖礼典をすること、それも確かに神様が求めておられる「礼拝」です。しかしその根底には、私たちの「献身」が必要なのです。

ここでは、私たち自身の「からだ」を献げなさいと言われていています。キリスト教では、「心」を大切にします。目に見える外側のものだけでなく、目に見えない内側のものを大切にします。目に見える「行い」だけでなく、目に見えない「心」のあり方を大切にします。

しかしパウロは、「心」だけでなく、「からだ」をも献げるようにと言っています。それは、「心」と「からだ」の両方、つまり自分自身のすべてを献げるということです。

「献身」と聞くと、牧師や伝道者、宣教師などをイメージされるかもしれませんが。それらの人たちは確かに、自分の生活をすべて献げて伝道や牧会の奉仕をしています。しかし「献身」、つまり自分自身を献げることは、牧師や伝道者、宣教師だけに求められていることではなく、神様を礼拝するすべてのクリスチャンに求められていることなのです。

3. 神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として

では、私たちはどのようなものとして自分自身を神様に献げたらよいのでしょうか。それはまず第一に、「神様に喜ばれる」ものとして献げなければなりません。神様が何を喜び、何を悲しまれるかは、聖書に書かれています。神様は聖書を通して、御自身が何を喜ばれるかを明らかにしておられます。

ですから私たちは、「神様に喜ばれるもの」として自分自身を献げるには、聖書の御言葉

を読まなければなりません。そして聖書の御言葉に従わなければなりません。神様が喜ばれるものは、聖書の御言葉に従っている自分自身を神様に献げることです。「神様はきっとこれを喜ぶに違いない」と自分の頭で考えて、それを献げるのではなく、神様の御心に従ったものを献げる時に、神様は喜ばれるのです。神様の御心は、聖書の御言葉の中に明らかにされています。

第二に、私たちは「聖なる」ものとして自分自身を献げなければなりません。これは、倫理・道徳的な聖さでしょう。

第三に、私たちは「生きたささげ物」として自分自身を献げなければなりません。旧約時代は、動物を殺して、それをいけにえとして献げて、神様を礼拝しました。しかし今は、生きた私たち自身を献げることが求められているのです。

「生きている」とは、「いのち」があることです。聖書の中では、「いのち」は神様との交わりを意味します。逆に「死」は神様との交わりが絶たれることを意味します。私たちは、神様との豊かな生き生きとした交わりの状態を献げなければなりません。神様との交わりが死んでいる状態を献げても、神様は喜ばれません。

ここでの「生きている」という言葉は、「生活」とも訳せる言葉です。私たちは、「生活」を神様に献げなければなりません。私たちは、神様に喜ばれる聖い「生活」を神様に献げなければならないのです。つまり聖書の御言葉に示された神様の御心に従った聖い「行い」を伴った「生活」を神様に献げるのです。それこそが、私たちに「ふさわしい礼拝」なのではないでしょうか。

そうだとするなら、私たちに「ふさわしい礼拝」とは、主の日の「礼拝」だけに限定されるものではありません。主の日以外の週の六日間を通して、私たちは神様を「礼拝」することが求められているのです。

私たちの生活全体が「礼拝」なのです。私たちの生活を、神様の御言葉に従った聖い「生活」としていくこと、それこそが「献身」であり、私たちに「ふさわしい礼拝」なのです。そのような週の六日間の生活全体を通しての「礼拝」があり、その上で主の日に教会に共に集まって献げる公的な「礼拝」があるのです。ですから私たちは、主の日に約一時間程度、神様を礼拝すればそれで良いではありません。私たちは、全生活を通して神様を「礼拝」するのです。

おわりに

神様は私たちを愛し、イエス様によって私たちを罪の奴隷から贖い出し、新しい永遠のいのちを与え、神様の子どもとしてくださいました。私たちは神様から豊かな「恵み」を与えられました。神様は私たちに、その恵みに応答することを求めておられます。その恵みを受け取るだけでなく、応えてほしいと願っておられます。

神様が私たちに求めておられることは、まず第一に「礼拝」です。その「礼拝」は、主の日の礼拝だけでなく、全生活にわたる「礼拝」です。全生活にわたって、神様の御言葉に従

って自分自身を聖いものとして献げる、「献身」を伴う「礼拝」です。

私たちの全生活において、神様の御言葉に従わなければなりません。私たちの生活の隅々まで神様の御言葉に従っていく、それこそが私たちの「献身」であり、私たちにとっての「ふさわしい礼拝」なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちを愛し、イエス様を通して私たちに豊かな恵みを与えてくださり感謝いたします。

あなたは私たちに、御自身の恵みに応答することを求めておられます。あなたがひとり子イエス様の尊いのちを、私たちに献げてくださったように、私たちも自分自身を、全生活をあなたにお献げして、あなたを礼拝して歩めますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。